

ルートヴィヒ一世のバイエルン王国統治

——1825 年から 1848 年までの内政の考察——

木 野 光 司

は じ め に

本稿ではバイエルン第二代国王ルートヴィヒ一世（Ludwig der Erste, 25. 8. 1786 - 29. 2. 1868）が即位する 1825 年 10 月から「ローラ・モンテス事件」によって退位する 1848 年 3 月までの 22 年余りの期間を中心に、ルートヴィヒ一世の治世の考察をおこなう。ルートヴィヒが即位するまでの事績については、すでに拙論「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国—第二代国王の少年時代から即位まで—」において論じた⁽¹⁾。またルートヴィヒの即位以前の文化政策上の業績については、拙論「バイエルン王国初期のミュンヘン改造—1778 年から 1825 年までの業績を中心に—」において、初代国王の業績と並んで紹介した⁽²⁾。本稿では、考察の対象をルートヴィヒ一世の政治体制改革、国土開発、宗教政策等の内政に焦点を当てることにする。

-
- (1) 木野光司「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国—第二代国王の少年時代から即位まで—」（関西学院大学人文学会紀要『人文論究』第 67 巻第 1 号 2017 年 79-104 頁）参照。（本論文からの引用は「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国」と略記する。本稿で引用する全文献の発行所、発行年については末尾の「参考文献」リストを参照されたい。）
- (2) 木野光司「バイエルン王国初期のミュンヘン改造—1778 年から 1825 年までの業績を中心に—」（関西学院大学文学部ドイツ文学研究室年報『KG ゲルマニステイク』第 19・20 合併号 2016 年 71-92 頁）参照。

第1章 宮廷と政府の改革

1825年10月12日深夜、初代国王マックス・ヨーゼフ一世（**Maximilian der Erste Joseph, 1756-1825**）が逝去した。王位継承者ルートヴィヒは15日にバート・ブリュッケナウ（**Bad Brückenau**）で訃報を受け取り、18日にミュンヘンに到着した。彼は翌19日に「憲法への宣誓」儀式を済ませ、第二代国王「ルートヴィヒ一世」を名乗った。この時ルートヴィヒは39才になっており、妻テレゼ（**Therese, 1792-1854**）は33才で、その時点ですでに長男マクシミリアンを含む6人の子供をもうけていた⁽³⁾。

第1節 即位後の宮廷の掌握

1. 支配体制の確立

ルートヴィヒ一世の大部の伝記を著したゴルヴィッツァーは、王の性格を次のように要約している。——王は、重度の難聴の結果、所作がぎこちなく、思うように自己表現ができないことに起因する癇癢発作が多かった。8才で実母を亡くし、父親や義母との関係も良くなかったことから、周囲の人々の愛情に飢えていた⁽⁴⁾。彼は妻テレゼと家族を大事にする気持ちはあったが、彼自身が「情熱」と呼んだ強い性的欲求に負けて多くの愛人を作った。一方で、少年期に身につけた君主としての倫理観とカトリックの宗教観によって強い義務感と罪悪感にも支配されていた。彼のモットーは「公正且つ頑強」（**gerecht und beharrlich**）であり、君主の権威を重んじ、自らの決断を神聖なものとした結果、自ら下した決断が誤りであったことを認めることを頑なに拒んだ⁽⁵⁾。

- (3) Karl Borromäus Murr: *Ludwig I. Königtum der Widersprüche*, S. 64 参照。ルートヴィヒが王位について後、さらに二人の子供が生まれる。（本書からの引用は *Ludwig I. Königtum der Widersprüche* と略記する。）
- (4) Heinz Gollwitzer: *Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz. Eine politische Biographie*, S. 251f. 参照。（本書からの引用は *Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz* と略記する。）
- (5) *Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz*, S. 259 参照。

——また、ルートヴィヒは「王権の独立」が「神の慈悲」によって賦与されたと真面目に信じていたようである⁽⁶⁾。

ルートヴィヒは即位後直ちに支配体制の刷新をおこなった。彼は、父親とは異なり、何事も自分で決めることを望んだ。父マックス・ヨーゼフ一世は国家運営の枢要な部分を有能な大臣モンジュラ伯爵に委ねていた⁽⁷⁾。しかし、ルートヴィヒ一世は政治のあらゆる分野に目を届かせ、すべてを自分で決めようとした。彼は大臣たちを命令を文書にまとめるだけの「書記」(Schreiber)と見なしていた⁽⁸⁾。大臣たちの首のすげ替えが、新国王の最初の仕事であった。まず最も重要な外務に関しては、即位前より対立関係にあったレヒベルク伯爵(Rechberg)を解任し、内務大臣テュルハイム(Thürheim)に兼任させた上で、1827年により有能なツェントナー男爵(Zentner)を外務大臣にし、翌1828年にはアルマンスペルク伯爵(Armansperg)を外務大臣と財務大臣に任命した。1832年にはバイエルン史上初めてプロの外交官ギーゼ男爵(Gise)を外務大臣に任命している。ギーゼはバイエルン初のプロテスタントの大臣でもあった。彼は控えめな官僚としてルートヴィヒ治世最長の14年間も大臣職を勤めることになる。ゴルヴィッツァーは、ギーゼがその地位を守るために君主の機嫌取りに終始していたと批判している⁽⁹⁾。上の例に見られるように、ルートヴィヒは意に沿わない大臣の首をすげ替えることを繰り返すことになる。

2. 王族の権威確立の試み

ルートヴィヒ一世は「王族」を厳格に規定した。その構成員を、国王とその

(6) Hans-Michael Körner: Geschichte des Königreichs Bayern, S. 99f. 参照。(本書からの引用は Geschichte des Königreichs Bayern と略記する。)

(7) マックス・ヨーゼフとモンジュラ伯爵による「バイエルン改革」については、木野光司「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」(関西学院大学文学部ドイツ文学研究室年報『KG ゲルマニスティク』第13号2008年71-86頁)参照。(本論文からの引用は「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」と略記する。)

(8) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 67 参照。

(9) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 268f. 参照。

妻テレーゼとその子供たち、王の義母カロリーネ、王の兄弟姉妹、王の叔母マリー・アマリーエそしてバイエルン在住の昔からの「バイエルン公爵家」一族と規定した。それによってルートヴィヒは、ナポレオンの養子ボアルネ (Beauharnais, 1781-1824) が名乗った「ロイヒテンベルク家」(Leuchtenberg) を「王族」から排除し、ボアルネの妻となっていた実妹アウグステのみを数え入れた⁽¹⁰⁾。王妃となったテレーゼは、4 人の息子と 5 人の娘を産んで王家の安定に寄与したが、夫の政治には口出ししなかった⁽¹¹⁾。

ルートヴィヒにとって、国の後継者の育成と婚姻政策は重要な課題であった。長男マクシミリアン・ヨーゼフ (後の国王 Maximilian II. Joseph, 1811-1864) と次男オットー (Otto, 1815-1867)、三男ルイトポルト (Luitpold, 1821-1912) が、後に様々な役割を果たすことになる息子たちであった⁽¹²⁾。また長男の結婚相手が王家にとって最大の関心事であった。ロシア皇帝ニコライ一世の娘との縁談があったが、ルートヴィヒは強大なロシアへの依存を恐れ、また贅沢な嫁を迎えることの恐れなどもあり、プロイセン王女マリーとの結婚を承認した⁽¹³⁾。次男オットーは後に「ギリシア王」になるが、その経緯は本稿では取り上げない。三男ルイトポルトは、その晩年にバイエルン王国「摂政」(Prinzregent) となるが、それははるか後の 1886 年のことになる。長女のマティルデ (Mathilde, 1813-1862) は後にヘッセン大公ルートヴィヒに嫁し、三女のアデルグンデ (Adelgunde, 1823-1914) はモデナ公フランツ一世、四女ヒルデガルト (Hildegard, 1825-1864) はオーストリア大公アルブレヒトに嫁することになる。五女のアレクサンドラ (Alexandra Amalie,

(10) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 316f. 参照。王が妹とボアルネに対して取った冷たい態度については、「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国」101 頁に詳しい。

(11) Hans Rall: Wittelsbacher Lebensbilder. Von Kaiser Ludwig bis zur Gegenwart. (本書からの引用は Hans Rall: Wittelsbacher Lebensbilder と略記する。) 付録の家系図 Genealogie des Hauses Wittelsbacher 参照。

(12) 四男アーダルベルト (Adalbert, 1828-1875) は大きな役割を果たすことはなかった。

(13) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 322f. 参照。

1826-1875) は結婚せず、女子修道院長になる⁽¹⁴⁾。

王族には厄介者も付きものだった。王と同年齢のバイエルン公爵ピウス (Pius August) は、犯罪を繰り返したあげく精神病で死んだ。また王の伯父ヘッセン＝ダルムシュタット公ゲオルク・ヴィルヘルム (Georg Wilhelm) は莫大な借金をこしらえてルートヴィヒを困らせた。ルートヴィヒの次弟カール (Karl, 1795-1875) は二度身分の低い女と結婚し、王を苛立たせた。しかも、継母カロリーネに可愛がられたカールは、テーゲルン湖畔の父の城館など多くの遺産に加えて、次男の財産、軍高官の報酬などの財産を得ていたため、ルートヴィヒ一世の不興を買っていた⁽¹⁵⁾。

第2節 政府支配体制の確立

1. 伝統的貴族の重用

ルートヴィヒ一世は伝統的身分を重視し、貴族や臣下の序列を明確にした。彼が王族に次ぐ者と認めたのは、古い家柄の者たちであった。その中でその格式と財力で最も権勢を誇ったのはトゥルン・タクシス侯爵家 (Thurn und Taxis) やエッティンゲン＝ヴァラーシュタイン侯爵家 (Öttingen-Wallerstein) などであった⁽¹⁶⁾。それに次ぐのが、バイエルンに領地を持っていた伯爵家や男爵家などの下級貴族であった。ザインスハイム家、アルコ家、プライジング家などがその代表である。その下に、様々な功績や富の力で貴族の称号を得ていた者たちが置かれた。

すでに1800年代に、初代国王に仕えた大臣モンジュラの啓蒙主義的政策と1808年発布の「憲法」(Konstitution) によって、貴族領での免税や国の要職の独占等の封建的な貴族特権は廃止されていた⁽¹⁷⁾。しかし、領主裁判権

(14) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 323f. および Hans Rall: Wittelsbacher Lebensbilder 付録の Genealogie des Hauses Wittelsbacher 参照。

(15) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 324f. 参照。

(16) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 336 参照。

(17) 「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」80-84 頁及び Geschichte des Königreichs Bayern, S. 48-59 参照。

(*Patrimonialgerichtsbarkeit*) は撤廃されないまま残り、外交や軍の上層部は貴族によって独占されたままであった。また 1818 年 5 月 26 日に発布された「バイエルン憲法」(*Verfassung*) によって作られた二院制議会の第一院「帝国院」(*Reichsrat*) の構成員の全員が王族や貴族階級、第二院「領邦議会」(*Landtag*) においても貴族、聖職者併せて四分の一を割り当てられていた⁽¹⁸⁾。王子時代には民主的な憲法を擁護して父親を困らせたルートヴィヒであるが、国王になると自らの権威を重視する立場から、貴族の権威も重視し、自らの大臣や大使にも、外国からバイエルンに赴任する大使にも貴族を求めた⁽¹⁹⁾。

ルートヴィヒは貴族の称号を利用して、有能な人物を取り込むことも心得ていた。初代国王以来の忠実な軍人ヴレーデは市民階級出身であったが、侯爵(*Fürst*) の称号を持つ元帥に昇進した。農民層出身のツェントナーも男爵の爵位を与えられて大臣を務めた。財産を持たない貴族や、相続する財産を持たない貴族の二三男たちが暮らしを立てるには、軍人、王の側近、官僚として功績を挙げ、ルートヴィヒの目にとまるしか方法はなかった⁽²⁰⁾。

宮廷や国家の枢要な人事を他人任せにしなかったルートヴィヒは、その人事権を利用して貴族たちを操ったのである。

2. 厳しい官僚支配

ルートヴィヒ一世は古めかしい君主原理で王国を支配しようとしたが、当初、官僚たちの多くは王の言いなりにはならなかった。彼らの多くはモンジュラ大臣が築いた近代国家の原理を支持しており、ルートヴィヒが復活しようとした貴族重視の封建的政策およびカトリック教会優遇などに強く抵抗した⁽²¹⁾。

(18) Wilhelm J. Wagner: *Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte*, S. 39 参照。(本書からの引用は *Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte* と略記する。)

(19) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 339 参照。

(20) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 341f. 参照。

(21) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 343f. 参照。

王座に就いた当初、ルートヴィヒは自分のお気に入りの大臣を次々と任命するなどして、王の意向を遂行させようとした。しかし、改革派のアルマンスペルクを重用する一方、作家シェンクを内務大臣に据えてカトリック強化の政策を命じるなど、王の気まぐれが政策の混乱を生み、次々と大臣が入れ替わることになった⁽²²⁾。すでに国家は近代的な官僚組織なしには機能しなくなっていたが、ルートヴィヒは君主の人事権を執拗に利用し、次第に官僚達をも飼い慣らすことに成功していった⁽²³⁾。

バイエルン王宮には宮廷と国家の役所だけでなく、様々な伝統的な組織も付随していた。数百人の下級役人や使用人が、兵器庫 (Magazin)、厩舎 (Marstall)、宮廷劇場 (Hoftheater)、宮廷薬局 (Hofapotheke)、宮廷厨房 (Hofküche) などで雇用されていたようである⁽²⁴⁾。これらの付属機関の外部に、宮廷に商品を納入する「宮廷御用達商人」(Hoflieferant) たち、さらにその外部に 1825 年時点では 6 万 5 千人を数えるミュンヘン市民が存在した⁽²⁵⁾。現在のミュンヘン旧市街にもその名残の施設が多く見られるように、愛国的で強い支配欲を持つルートヴィヒ一世の諸施策が、バイエルン王国と首都ミュンヘンの特徴を作りだすことになる⁽²⁶⁾。

第 2 章 国内政策の変更と交通網の整備

第 1 節 バイエルン領土政策の変更

初代国王の右腕モンジュラ内務大臣によるフランス的なバイエルン統合政策は、古いバイエルンを一挙に近代国家に変貌させる働きをした⁽²⁷⁾。モンジュ

(22) Armansperg 伯爵は 1826 年から 32 年頃まで内務・財務大臣、1828 年から 31 年まで外務大臣も兼務した。Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 95 参照。

(23) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 346-348 参照。

(24) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 329f. 参照。

(25) Friedgund Freitag: Leo von Klenze. Der königliche Architekt, S. 32 参照。

(26) Geschichte des Königreichs Bayern, S. 68-71 参照。

(27) 「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」80-82 頁参照。

ラの近代化政策に反対していたルートヴィヒが即位後におこなったのは、モンジュラ時代の政策の復古的修正であった。中でも大きなものは、1838年に「イーザール管区」(Isarkreis)、「レーゲン管区」(Regenkreis)などの河川名に因むフランス風行政区名を、伝統的な「オーバーバイエルン管区」,「レーゲンスブルク管区」といった名称に戻したことである。ルートヴィヒは、初代国王時代の中央集権国家志向を廃して、伝統的な地域文化を重視したのである⁽²⁸⁾。しかし、国土の統治は一筋縄ではいかなかった。バイエルン王国を構成する地域には、選帝侯国以来の領地「古バイエルン」(Altbayern)、1803年の帝国議会決定によって無理やり編入された「フランケン」(Franken)や帝国自由都市だったプロテスタントの強いニュルンベルク、バイエルンに親近感を持たないアンスバッハやバイロイトなどが含まれていて、彼らに「バイエルン国民」という意識を植え付けることは容易ではなかった。

「古バイエルン」の住民には農民と小市民が多く、プファルツ系の君主(Karl Theodor 以降の君主)たちがバイエルンの伝統を守ることを望んだ。ただそれは今日のバイエルンを特徴付ける「カトリック」で「保守的」という伝統ではなかったという。この特徴は、むしろルートヴィヒ一世の治世、特にアーベル(Karl von Abel)がヴァラーシュタインを追い落として内務大臣に就いた1837年頃から1847年に形成された特徴であるらしい⁽²⁹⁾。

他方、新たにバイエルンに編入されたフランケンの人々は、ミュンヘンの君主からの押しつけを快く思わなかった。またニュルンベルクやアンスバッハなどはプロテスタント住民が多く、ルートヴィヒのカトリック擁護に抵抗を示した。カトリックの旧司教領ヴェルツブルクやバンベルクの市民たちも、ヴェ

(28) モンジュラが設置した行政区については Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 29 参照。「管区」(Kreis)の導入の経緯及び「管区」という邦訳については、谷口健治『バイエルン王国の誕生—ドイツにおける近代国家の形成』145-151 頁を参照。またルートヴィヒによる行政区改編については Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 361f. 参照。

(29) アーベルが内務大臣としてカトリックを覇権した1837-47年を「アーベル時代」(Ära Abel)と呼ぶらしい。Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 122 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 355 参照。

ルツブルク大学の学生たちを筆頭に啓蒙精神に触れた意識の高い住民が多く、領邦議会に優れた代議員を送るなどしてルートヴィヒの保守的政策に抵抗した。しかし、フランケン地方の長官レヒベルク（**Rechberg**）などが、反政府的代議員を厳しく訴追するなどの政治的弾圧をおこなうことで、これらの地域も次第にルートヴィヒの政策に従うようになっていった。

王の故郷プファルツの人々は、バイエルン編入前にフランス領として「ナポレオン法典」による民主化を経験していたので、編入後もバイエルンとは異なるリベラルな制度が維持され、フランス時代を懐かしむ感情が長く続いた。ルートヴィヒは一族の故郷プファルツを愛したが、プファルツからの代議員はルートヴィヒの保守的政策に強く反対した⁽³⁰⁾。

第2節 国家財政の再建

ルートヴィヒは財政再建に最適の性格であった。父親のマックス・ヨーゼフは気前の良い大雑把な君主であったが、ルートヴィヒは幼い頃から無駄遣いをしない人間であった。彼は王子時代から財政再建の方策を温めており、即位後直ちに様々な方針を打ち出した。

1. 宮廷経費の削減

王はまず自らの周辺の経費の削減に取り組んだ。宮廷役人の数を減らし、彼らの給料を下げた。役人たちの副業を禁じ、また「宮廷薬局」の無料利用などの特権に厳しい制限をかけた。さらに国王お抱えの「イタリアオペラ」劇団を廃止し、宮廷劇場の予算も大幅に削減した。「イーザール門劇場」などへの補助金も削減したため、劇場は閉鎖に追い込まれた。

彼は身内に対しても厳しい措置をとった。義母のカロリーネには、本人の意向に反して老後の城としてヴェルツブルクの城を割り当てた上に、その改修費も削減した。弟のカールが司祭サラベールが住んでいた館を改修後「パレ・ロ

⁽³⁰⁾ Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 359f. 参照。

ワイヤル」(Palais Royal)と改名して住居とした時にも、弟が求めた改修費用8万フロリンの借金を断った。息子のマックスの金遣いにも厳しい目を光らせ、息子が旅行などで借金を負った時には王自ら息子の返済計画を作成したそうである⁽³¹⁾。

2. 国家予算の削減

バイエルン王国は、1825年時点で11500万グルデンの負債と1600万グルデンの年間赤字を抱えていた⁽³²⁾。王位就任1ヶ月後にルートヴィヒは自らの肝煎りで「国家予算削減委員会」(Kommission betr. die im Staatshaushalt zu machenden Ersparungen)を立ち上げ、節約だけではなく、ルートヴィヒが構想してきた様々な政策を立案させている。王はこの委員会で地方議会の設立、自治体の再編、王室費設定、各省の再編なども検討させ、自らの意向を反映させていった。

予算削減の最初の対象は、国家機構であった。ルートヴィヒは大臣の俸給を2万グルデンから40%減額し、さらに不要な部局、「紋章局」(Reichsheroldsamt)、「枢密会計局」(geheimes Taxamt)などを廃止したり、他の部局に兼務させた。職務も減らし、多くの役人を退職させた。また特殊な技能を要する職務以外の要員は低賃金の一時雇いでまかなうことにした⁽³³⁾。

儉約の次の対象は外交や祝典経費であった。王は、外国の賓客の接待費用、バイエルン使節の派遣費用などを極端に切り詰めた。その節約ぶりは尋常ではなく、大使たちは公務のための支出の多くを自らの出費でまかなうことを余儀なくされた⁽³⁴⁾。

経費削減の対象は地方部局や公的施設にも及んだ。公務員の俸給は下げら

(31) 宮廷経費の削減については Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 404-406 参照。

(32) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 96 参照。

(33) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 407-408 参照。

(34) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 410-432 にルートヴィヒが臣下に求めた無理難題の数々の実例が挙げられている。

れ、出張旅費は削られ、様々な研修旅行が必要かどうか厳しく吟味された。王はエアランゲン大学創立百周年行事の参加費用も削減した。その結果、全国の公務員、教員、牧師たちには辛い状況が生じた。

ルートヴィヒの経費削減方針は軍隊にも及んだ。王は100万グルデンの経費削減目標を立て、国家予算と同様の予算削減委員会を結成し、多くの節約計画を立案した。その結果、近衛連隊（**Garderegiment**）は解散され、「軍馬飼育場」（**Armeegestüt**）の閉鎖、軍楽隊（**Militär-Musikband**）の縮小などが決められた。軍人・兵卒の待遇、雇用、訓練も極限まで切り詰められ、食事も一日一食という有様だった。王はさらに軍の司法部門も廃止しようとしたが、ヴレーデ元帥を筆頭とする軍部の抵抗に遭ってこの試みは頓挫した⁽³⁵⁾。

一方で王は要塞（**Festung**）建設には大金を投じた。オーストリア軍に対する防備としてインゴルシュタット要塞が計画された。軍事的見地からはレーゲンスブルクの方が有効とされたが、費用の点でインゴルシュタットの方が安上がりであった。1828年8月25日の王の誕生日に王自らの手で「ティリー要塞」の礎石が置かれ、1847年の同日に未完成ながら防壁の輪が閉じられた。しかし、この要塞は結局のところ歴史建造物としての意味しか持たなかった。バイエルンではまた、ライン右岸に「ゲルマースハイム要塞」（**Festung Gernersheim**）を建設し、「ドイツ連邦」防御用の「連邦要塞ランダウ」（**Bundesfestung Landau**）もフランスの賠償金で建設した⁽³⁶⁾。両者はフランス軍に対する防備であったが、実際に活用されることはなかった。

3. 財政政策の功罪

ルートヴィヒ一世が財務大臣アルマンスペルクを使っておこなった大幅な経費削減は、彼が王位について6年目の1831年に目に見える効果を現した。バイエルン王国の累積債務はこの年から減少に転じた。1840-43年の期間の予算案では2100～2400万グルデンの黒字見込みとなり、王はこの黒字分を用い

⁽³⁵⁾ Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 427ff. 参照。

⁽³⁶⁾ Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 433-435 参照。

て、次節で述べるプロジェクト、「ルートヴィヒ運河」や「アウクスブルク・ニュルンベルク鉄道」の建設を進めることができた⁽³⁷⁾。

ルートヴィヒは自分の緊縮策が当初国民には嫌われるが、後には評価されると思っていた。しかし、実際はその逆であった。当初この政策はやむを得ないものと識者たちに受け止められていた。しかし、緊縮政策が自己目的化した結果、行政組織が機能しなくなり、それに対する批判が高まっていった。その批判の先鋒に立ったのが、中部フランケン行政区長のギーヒ伯爵（Giech）だった。彼は行き過ぎた緊縮政策を批判する文書を書いて辞職した。その文書は押収されたが、その写しが公にされ、王の儉約策がもたらした弊害を明らかにした。それによると、不十分な公共予算のせいで道路補修ができず、校舎、公務員宿舎、刑務所なども劣悪な状況のまま放置されていた。教師の待遇がひどく、財産のない教員は副業でやっと食いつなぐ状況であった。プロイセンでおこなわれているような商人や企業家に対する援助も全く与えられなかったという⁽³⁸⁾。

ギーヒ伯爵がフランケンの窮状を訴えた後にも改善は見られなかったようである。バイエルン高官だったマウラー（von Maurer）が1847年に書いた回想録にも、ルートヴィヒが人件費儉約のために、年金受給資格取得寸前の者を退職させ、病気の公務員を退職に追いやり、死亡公務員の遺族のための基金を自分の国内旅費に流用していること等が書かれているらしい。

ルートヴィヒ一世には、彼の父親マックス・ヨーゼフが備えていた君主らしい鷹揚さが全く欠けていた⁽³⁹⁾。

第3節 国土開発と産業振興

1825年からの20年間はドイツ諸国で様々な近代化が進んだ時代であった。父王の時代から始められていた教育と職業教育の充実は、1825年に実施され

(37) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 415 参照。

(38) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 416f. 参照。

(39) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 419f. 参照。

たランツフト大学の首都ミュンヘンへの移転⁽⁴⁰⁾、そして1827年に実現した「ミュンヘン工科学校」(Polytechnische Zentralschule)設立などの形を取るようになる⁽⁴¹⁾。前者は、現在のミュンヘン大学であり、後者は1868年に「ミュンヘン工科大学」に昇格することになる。

ルートヴィヒは王子時代から経済問題にも強い関心を示していた。彼が就位後に力を入れ、バイエルンが主導して1828年にヴュルテンベルク王国と結んだ「関税同盟」(Zollverband)は、北部ドイツ諸国と合併して1834年に成立した「ドイツ関税同盟」(Der Deutsche Zollverein)の基盤となった⁽⁴²⁾。この関税同盟はオーストリアを除外した形でのドイツ語圏統合に大きく寄与することになる。ルートヴィヒは、自らも投資家として様々な事業をおこなった。彼が推進して1835年に設立された「バイエルン抵当為替銀行」(Bayerische Hypotheken- und Wechselbank)や1842年に設立された「商工会議所」(Handelskammer)はバイエルンの産業化に役立つことになった⁽⁴³⁾。

これらの産業政策以上に大きな成果を上げたのが、ルートヴィヒ時代に開始された大規模な交通インフラの整備であった。その成果について見ることにする。

1. 運河建設

ルートヴィヒ一世が最も関心を示した交通手段は運河と船舶輸送であった。1819年に始まった第一回バイエルン議会の時から話題になったのが、ライヒェンバッハ(Georg von Reichenbach)が提唱した「ライン・マイン・ドーナ

(40) Alois Schmid, Katharina Weigand (Hrsg.): Die Herrscher Bayerns. 25 historische Portraits von Tassilo III. bis Ludwig III., S. 311 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 549f. 参照。

(41) Sigumund Bonk, Peter Schmid: Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 43 参照。(本書からの引用は Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919 と略記する。)

(42) Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 36ff. 参照。

(43) Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 45 及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 654f. 参照。

ウ運河」建設であった。1820年頃のヨーロッパでは英国を筆頭に水運が主要輸送手段として定着していたため、ルートヴィヒの考えは時流に合致していたといえる⁽⁴⁴⁾。それに対抗する案として新たに浮上していたのが「鉄道」敷設案だった。「運河派」と「鉄道派」の対立の中、ルートヴィヒは技術的に確立していた運河建設案に傾き、1834年に建築顧問官ペヒマンに作成させた850万フローリンの建設予算での「運河建設」案を議会で承認させた⁽⁴⁵⁾。その計画では、民間投資資金が総予算の半分確保された段階で、国が資金の四分の一を出資して株式会社を作るようになっていた。

しかし、この計画に投資する者は現れず、事業計画が宙に浮いてしまった。この時、「バイエルン抵当為替銀行」に投資していたフランクフルトの銀行家ロートシルト（Rotschild）が、王の意を受けて名乗りを上げ、1836年「バイエルン・ドーナウ・マイン接続運河株式会社」による運河建設が始まった。資本金は1千万フローリンで、ロートシルト家に有利な条件が与えられていた⁽⁴⁶⁾。「ドーナウ・マイン運河」別名「ルートヴィヒ運河」は紆余曲折の末1852年に完成し、バイエルン王国に譲渡された。しかし、完成した運河はルートヴィヒたちが期待していたものに遠く及ばない貧弱なものであった。この失敗によって、次のプロジェクトと考えられていた「ミュンヘン・ドーナウ運河」はじめ、すべての運河建設計画は立ち消えになってしまった⁽⁴⁷⁾。

2. 鉄道建設

ルートヴィヒは鉄道より運河建設を優先していたが、ニュルンベルクの事業者たちが鉄道建設の発起人となっていた。この案に王が乗ることで、1834年

(44) Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 38 参照。

(45) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 657-659 参照。

(46) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 660f. 参照。

(47) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 662 及び Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 56 の運河の写真参照。ただ、ドーナウ運河開発はドイツから黒海、そして黒海経由でのギリシアまでの船舶輸送を可能にするという成果はもたらした。Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 39 参照。

に「ニュルンベルク・フルト・ルートヴィヒ鉄道会社」(Nürnberg-Fürth-Ludwigs-Eisenbahngesellschaft)が設立された。1835年12月7日にニュルンベルク駅から英国製列車「アードラー」が発進した。このドイツ初の鉄道事業が成功したことで、この後数十年ドイツ中で鉄道建設ブームが続くことになる⁽⁴⁸⁾。ルートヴィヒは依然として鉄道建設に乗り気でなかったので、ヴァラーシュタインが仲間と計り、1836年王のギリシア滞在中に留守居役に賦与された特権を利用して「アウクスブルク・リンダウ」、「アウクスブルク・ニュルンベルク」、「ミュンヘン・ザルツブルク」ルート鉄道敷設の建設会社設立の許可を出した。ヴァラーシュタインは、この計画を王に報告する文章において、この鉄道計画によってミュンヘンが「一級の商業都市」、「南ドイツのウィーン」(Wien Süddeutschlands)になれると述べて、王の自尊心をくすぐることに成功した⁽⁴⁹⁾。また保守派のアーベルもルートヴィヒに鉄道建設の重要性を説いて継続させたことで、バイエルンの鉄道と経済は大きく発展した。1840年に「ミュンヘン・アウクスブルク鉄道」が開通し、1843年開催の議会がこの鉄道会社の買収を決議した結果「バイエルン国鉄」が誕生した⁽⁵⁰⁾。

バイエルンの鉄道を隣国と接続する際には、軍事的配慮が最も重要な要因となった。ルートヴィヒは隣国との列車の接続をためらい、1846年議会の要請によりようやくウルム経由でヴュルテンベルク王国鉄道との接続を認めた。また北に向かう路線としては、当初の王の反対を押し切って「ニュルンベルク・バンベルク・ホーフ」路線が認められた。しかし、フランスとの鉄道路線接続は、軍事的見地及び1848年の革命などが影響して長く実現しなかった⁽⁵¹⁾。

鉄道建設に伴う線路、機関車、貨車などの製造はバイエルンの鉄鋼、機械工業を盛んにし、バイエルンにおける産業革命の起爆剤となったようであ

(48) Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 53の開通式の絵及び Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 662 参照。

(49) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 663 参照。

(50) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 67 参照。

(51) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 664f. 参照。

る⁽⁵²⁾。ニュルンベルクは M.A.N. の前身となる鉄鋼機械会社などが設立されて重工業の中心地となり、アウクスブルクは交通の要衝として繊維産業の中心地となった⁽⁵³⁾。臣下達の賢明な政策によって、バイエルン王国の交通インフラは 19 世紀の産業と商業の振興に大いに役立つことになった。

第 3 章 政治思想の変遷と宗教政策

第 1 節 リベラルから反動への変化

1. 反動化の契機

1818 年 5 月に発布された「憲法」によって、「帝国院」(Reichsrat) と「領邦議会」(Landtag) の二院制議会が生まれ、ルートヴィヒ即位後最初の議会は 1827 年から 1828 年にかけて開催された。この時期まだ比較的リベラルな考えを持っていたルートヴィヒは、貴族たちの特権を弱める施策を「帝国院」議員たちの抵抗を排して遂行しようとしていた⁽⁵⁴⁾。様々な抵抗に遭いながらも「領邦議会」ともまだ関係を保っていた⁽⁵⁵⁾。

1830 年 7 月初めにパリで勃発した革命もバイエルン王国には深刻な影響を与えることはなかった。同年 10 月のオクトーバーフェストでも革命的動きは見られなかった⁽⁵⁶⁾。ところがルートヴィヒは次第に革命に対する恐怖にとらわれ、12 月末にミュンヘン大学生が引き起こした騒動に過剰に反応した。

(52) Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 42 参照。

(53) Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte, S. 58 参照。

(54) Josef Stieler が 1826 年に描いたルートヴィヒ一世の有名な肖像画の背景には、彼が後にレーゲンスブルク郊外に造る「ヴァルハラ」Walhalla が、そして彼が持つ王錫の下には「憲法書」が描き込まれている。これが王位に就いた時のルートヴィヒの理想を表していたとされる。Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919, S. 51 参照。他方で、ケルナーやムルは、若き日のルートヴィヒが「リベラル」であったとする解釈に否定的な考えを示している。Geschichte des Königreichs Bayern, S. 98f. 及び Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 93f. 参照。

(55) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 386f. 参照。

(56) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 443f. 参照。

その騒動は「ゲルマニア」という学生組合メンバーによる非政治的な騒ぎにすぎなかったが、王は「ゲルマニア」の解散とメンバーの停学など厳しい見せしめ的な措置をとった。この事件には反応しなかったバイエルンの知識人たちも、ルートヴィヒが革命の幻影に怯えて、1831年1月末に「検閲」を再導入した時には強く反発した⁽⁵⁷⁾。

2. 領邦議会との対立

1831年初頭に開会された議会において、ルートヴィヒの態度が1827年の議会開催時と変わっていることが明らかになった。この年の議会は憲法に定められた6年に一度の重要な予算審議を含む議会であった⁽⁵⁸⁾。前回と異なり、この議会ではルートヴィヒが提出した反動的な法案に強く抵抗したのは第二院である「領邦議会」のリベラルな議員たちであった。国王が望む「検閲法案」を提案した内務大臣シェンクは攻撃の標的になり、議会で立ち往生したあげく、5月22日に辞任した。「検閲法案」もアルマンズベルクをはじめとするリベラルな大臣たちの反対で6月12日に撤回された⁽⁵⁹⁾。ルートヴィヒは領邦議会の抵抗を苦々しく思っていたが、彼がこの年の議会で最重要視していたのは、「検閲法案」ではなく、「終身王室費」(lebenslängliche Zivilliste)を議会に承認させることであった。この議会は12月まで長引いた後、ようやく予算案の承認と終身ではない「王室費」を承認して閉じた⁽⁶⁰⁾。ルートヴィヒのもうひとつの成果は、「音楽堂」(Odeon)、「国立図書館」(Staatsbibliothek)、「絵画館」(Alte Pinakothek)建設費を国家予算から支出することを

⁽⁵⁷⁾ Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 447 参照。

⁽⁵⁸⁾ バイエルン王国の「領邦議会」の予算審議は6年単位と定められていて、議員の任期も6年だった。Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 847 の注 627 参照。

⁽⁵⁹⁾ Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 451f. 参照。

⁽⁶⁰⁾ その後、第2章で述べたようにルートヴィヒは国家予算の節約を果たし、それに見合った王室費の増額を領邦議会に要求し、1834年から退位するまで年額235万グルデンを受け取ったとされる。Bayerische Staatsbibliothek: Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen, S. 11 参照。

認めさせたことであった⁽⁶¹⁾。

第2節 リベラル勢力の排除

1831年6月に重鎮のツェントナーと若手のアルマンズペルクを中心とするリベラルな大臣が、議会運営の行き詰まりの打開策として、王の恣意的な国政でなく「大臣会議」(**Gesamt-Staatsministerium**)による国家運営を導入するように要求した。しかし、ルートヴィヒは、それを王権の制限を求めるものとして断固退けた⁽⁶²⁾。

ルートヴィヒは、保守的でカトリック信仰の農民や小市民階級を自らの支持母体として、国父としての政治を志向するようになっていた。それに不満を持っていたのが知識人階級と市民階級であった。その表れが、1832年5月27日の憲法記念日にバイエルン領プファルツでおこなわれた「ハンバッハの祭り」(**das Hambacher Fest**)と同日フランケン地方ガイバッハの公園で開催された「憲法祭り」(**Gaibacher Verfassungsfeier**)であった。ルートヴィヒは6月28日にヴレーデを指揮官とする軍隊をプファルツに派遣し、プファルツの住民に圧力をかけた⁽⁶³⁾。フランケンのリベラル派の中心はヴュルツブルク大学の教員と、元教授で市長をしていたベアー(**Behr**)であった。ルートヴィヒは対抗措置としてヴュルツブルク高等裁判所のアシャッフエンブルクへの移転や大学の閉鎖などの脅しをかけ、ヴュルツブルク市民をベアー市長から遠ざけ、彼の罷免と拘禁、「反逆未遂」の有罪判決までおこなった⁽⁶⁴⁾。ルートヴィヒは、1832年から裁判所にこれまでよりも厳しい取り締まりを命じ、彼におもねる裁判官ヘールマンや密告者ベルクスなどを利用して、リベラル派の

(61) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 453 参照。

(62) アルマンズペルクはこの後大臣を解任され、1832年末にギリシア王側近の名目で左遷されている。Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 454-458 及び S. 477f. 参照。

(63) Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 462 参照。

(64) Alois Schmid, Katharina Weigand (Hrsg.): *Schauplätze der Geschichte in Bayern*, S. 305-308 及び Ludwig I. von Bayern. *Königtum im Vormärz*, S. 464 参照。

リーダー、ベアやアイゼンマンに無期懲役の判決を出させた。ルートヴィヒはさらにヴェルツブルク大学で密告を集めさせ、リベラルな教員を追放させた。その結果、数百人のリベラル派が国家反逆罪や不敬罪の罪で禁固刑に処せられた⁽⁶⁵⁾。1843年5月27日の憲法発布25周年記念日に議会が祝祭行事をおこなおうとした時も、ルートヴィヒはミュンヘンのマリア教会の使用を禁止したり、行事の参加者を制限するなどの抵抗をした⁽⁶⁶⁾。

ルートヴィヒ一世の政治は、すべてをわが手で支配したがる君主による時代錯誤の統治体制、啓蒙主義者のモンジュラが導入した近代的な政治機構の空洞化、そして勤勉ではあるが臆病で偏狭な国王の恣意に特徴付けられていたと言えるだろう。

第3節 カトリック支援

1. カトリック国家への回帰

ルートヴィヒは幼少期からザンブガやザイラーといったカトリック教師によってカトリック信仰を育まれてきた。ルートヴィヒの王としての信念の根幹に「王位と祭壇」(Thron und Altar)という古い考えが横たわっていた。ただ、王権がローマ教会によって侵害されることは好まず、特に陰謀を企むとされたイエズス会を嫌った⁽⁶⁷⁾。彼は良きカトリックの守護者でありつつも、バイエルンの教会支配権をバチカンに委ねることは拒否した。バイエルンの大司教・司教の任免権はその最も重要なものであった⁽⁶⁸⁾。

2. カトリックの守護者としての活動

19世紀前半において、カトリックの守護者の資格を持っていたオーストリア皇帝フランツ一世もその後継者フェルディナント一世も、その任を積極的に

(65) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 465-471 参照。

(66) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 626 参照。

(67) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 513f. 参照。

(68) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 518 参照。

引き受けなかった⁽⁶⁹⁾。他方、プロイセン国王はプロテスタントの守護者を自認していた。ルートヴィヒ一世はこのような状況において、自らがドイツカトリックの守護者の役割を果たすことを目指し、様々な活動をおこなった。彼はドイツ各地のカトリック教会の建設費用を支出した。またヨーロッパの各地のカトリック施設の建設や維持費にも金を出した。

また 1829 年にウィーンで設立されたカトリック布教組織「レオポルト慈善団体」(Leopoldinenstiftung) に倣う形で、「ルートヴィヒ布教協会」(Ludwig-Missions-Verein) が 1838 年に設立され、王の庇護の下に北米などでの布教活動を開始した。バイエルンの布教者たちはペンシルヴェニアに「聖ヴィンセント教会」(St. Vincent) を建て、ベネディクト派の修道女たちがアメリカに派遣された⁽⁷⁰⁾。ルートヴィヒの力の及ぶ範囲はそれほど広くはなかったが、彼はドイツ連邦内のカトリック教徒の支援もおこなった。プロイセン、ヴュルテンベルク、スイスでは少数派であったカトリック教徒たちの擁護にも尽力した⁽⁷¹⁾。

バイエルンのカトリックはルートヴィヒによって多くの利益を得た。マックス・ヨーゼフ一世治下で権勢を振るった大臣モンジュラは、バイエルンにフランス流の啓蒙主義制度を導入し、カトリック勢力を徹底的に押さえ込んでいた⁽⁷²⁾。ルートヴィヒはモンジュラ時代に廃止されていた聖地巡礼など多くの宗教行事を復活させ、モンジュラが禁止していた公務員のミサや宗教行事への参加、小学校での宗教教育なども奨励し、国教としてのカトリックの復活に尽力した⁽⁷³⁾。彼がとりわけ力を入れたのが修道院の復活であった。王はロマン主義的な偏愛から、ベネディクト修道会とフランシスコ修道会の修道院を各地に作った⁽⁷⁴⁾。モンジュラ時代の終わりには大多数の修道院が世俗化政策によ

(69) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 566 参照。

(70) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 568-570 参照。

(71) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 578-582 参照。

(72) 「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」80-86 頁参照。

(73) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 520-522 参照。

(74) Ludwig I. Königtum der Widersprüche, S. 122f. 及び Geschichte des Königreichs Bayern, S. 73 参照。

って解散していたが、ルートヴィヒ即位後、最初の 10 年間で 84 の修道院が再興あるいは新たに建設された。1848 年にはバイエルン全体で 23 修道会が 132 の修道院を運営していた⁽⁷⁵⁾。ルートヴィヒの政策が、今日に至るバイエルンのカトリック的風景を生み出したことは間違いないようである⁽⁷⁶⁾。

3. プロテスタントの扱い

古くからカトリックを国教としてきたバイエルンであるが、初代国王マックス・ヨーゼフ一世の妻アウグステ・ヴィルヘルミーネも、後妻のカロリーネも、プロテスタントであった。また彼女らは生涯改宗することもなかった。ルートヴィヒ一世の妻テレーゼも、夫の執拗な要請を拒み続けて生涯プロテスタント信仰を守っただけでなく、ミュンヘン初のプロテスタント教会を設立することに尽力した⁽⁷⁷⁾。ルートヴィヒ自身はプロテスタントに批判的であったが、憲法上はプロテスタント少数派の権利も保護され、両教会とも役人と聖職者で構成される内務省管轄の「上級宗教委員会」(Oberkonsistorium)の監督を受けていた⁽⁷⁸⁾。ルートヴィヒ時代のプロテスタントの代表者たちは国王に忠実な態度をとり、また妻の死後に敬虔なカトリックに帰依した内務大臣アーベルは、「上級役員会」を王の教会政策の執行委員会と位置づけ、いかなる反論も許さなかったので、リベラルなプロテスタントの意見は全く反映されない体制が築かれた⁽⁷⁹⁾。バイエルン王国内でプロテスタント神学の中心となるエアランゲン大学の神学部の教授たちも、憲法に保障された権利が維持される限りにおいて大きな反対行動を取ることはなかった。

もちろんバイエルンのプロテスタントたちが、ルートヴィヒ一世の宗教政策に満足していたわけではなかった。内務大臣アーベルのカトリック優遇はしば

(75) Geschichte des Königreichs Bayern, S. 72 参照。

(76) ルートヴィヒは、彼が建立したベネディクト派の「ボニファツィウス教会」(St. Bonifaz)を自らの墓所に決めていた。Wittelsbacher Lebensbilder, S. 204 参照。

(77) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 318 及び S. 583-586 参照。

(78) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 586 参照。

(79) Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 590 参照。

しば抗議の対象になったし、プロテスタントの「マテウス教会」(Matthäuskirche)の建設が一向にはかどらないことも不満の種であった。周囲のプロテスタント国家は、プロテスタントの「グスタフ・アドルフ協会」(Gustav-Adolf-Verein)の設立と活動をバイエルン王国が禁止したことを批判した。しかしルートヴィヒはこの協会がバイエルンでプロテスタント布教やプロテスタントへの財政支援をすることを最後まで許さなかった⁽⁸⁰⁾。ルートヴィヒが1838年、彼が以前から気に入っていたカトリック聖人に軍隊が跪く習慣を復活させようと「拝跪令」を出した時も、プロテスタント圏の兵士たちの抵抗に遭った。しかし、ルートヴィヒの態度は強硬で、この儀式に反対したプロテスタント司教たちは反逆罪で訴えられたり、罷免されたりした⁽⁸¹⁾。この例からも、国王のカトリック偏愛が、無用の宗教的葛藤を生みだしていたと言えるだろう。

お わ り に

ゲーロ・マンは、1986年にミュンヘン王宮でおこなった講演に加筆した「ルートヴィヒ一世論」の冒頭を次の文章で始めている。——「ルートヴィヒ一世最盛期のミュンヘンのおそらく最も美しい描写と言えるものがゴットフリート・ケラーの小説『緑のハインリヒ』の中に見られる。(…)」⁽⁸²⁾——ゲーロ・マンは、19世紀半ばをミュンヘンが輝いていた時代として讃え、美しい首都の整備に尽力したルートヴィヒ一世を褒めている。しかし、ルートヴィヒがおこなった実際の政治を詳細に見ると、その多くが時代にそぐわないものであったことが判明する。

ゲーロ・マンが讃えているルートヴィヒ一世の文化面の業績と、紙幅の関係

⁽⁸⁰⁾ Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 592ff. 参照。

⁽⁸¹⁾ この「拝跪令」は長い抵抗の果てに1845年に廃止された。Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz, S. 596f. 参照。

⁽⁸²⁾ Golo Mann: Ludwig I. von Bayern, S. 21 から引用。

で本稿で扱えなかった外交面の業績については、稿を改めて論じることにした。
い。

参考文献

- *Bayerische Staatsbibliothek : Ludwig I. von Bayern. Der königliche Mäzen. Ausstellungskatalog (Bayerische Staatsbibliothek München 1986)
- *Bonk, Sigmund/Schmid, Peter (Hrsg.) : Königreich Bayern. Facetten bayerischer Geschichte 1806-1919. (Verlag Friedrich Pustet Regensburg 2005)
- *Freitag, Friedgund : Leo von Klenze. Der königliche Architekt. (Verlag Friedrich Pustet Regensburg 2013)
- *Gollwitzer, Heinz : Ludwig I. von Bayern. Königtum im Vormärz. Eine politische Biographie. (Ludwig Verlag in der Südwest Verlag München 1997)
- *Körner, Hans-Michael : Geschichte des Königreichs Bayern. (Verlag C. H. Beck München 2006)
- *Mann, Golo : Ludwig I. von Bayern. (Fischer Taschenbuch Verlag 2006⁴ (1999¹))
- *Murr, Karl Borromäus : Ludwig I. Königtum der Widersprüche. (Verlag Friedrich Pustet Regensburg 2012)
- *Rall Hans : Wittelsbacher Lebensbilder. Von Kaiser Ludwig bis zur Gegenwart. Führer durch die Münchner Fürstengründe. (Hirmer Verlag 2011⁷)
- *Schmid, Alois/Weigand, Katharina (Hrsg.) : Schauplätze der Geschichte in Bayern (Verlag C. H. Beck München 2003)
- *Schmid, Alois/Weigand, Katharina (Hrsg.) : Die Herrscher Bayerns. 25 historische Portraits von Tassilo III. bis Ludwig III. (Verlag C. H. Beck München 2006² (2001¹))
- *Wagner, Wilhelm J. : Bayern. Zwei Jahrhunderte bayerische Geschichte. (Magnus Verlag 2006)
- *木野光司「マックス・ヨーゼフ一世とバイエルン王国」(関西学院大学文学部ドイツ文学研究室年報『KG ゲルマニスティク』第 13 号 2008 年 71-86 頁)
- *木野光司「バイエルン王国初期のミュンヘン改造—1778 年から 1825 年までの業績を中心に—」(関西学院大学文学部ドイツ文学研究室年報『KG ゲルマニスティク』第 19・20 合併号 2016 年 71-92 頁)
- *木野光司「ルートヴィヒ一世とバイエルン王国—第二代国王の少年時代から即位まで—」(関西学院大学人文学会紀要『人文論究』第 67 巻第 1 号 2017 年 79-104 頁)

* 谷口健治『バイエルン王国の誕生—ドイツにおける近代国家の形成』（山川出版社
2003 年）

——文学部教授——